

Zero Sum Short Stories

零和短編集

13

母娘全裸哭寒流刑行



濠門長恭

目次

緒言	二
縁座無慘	四
恥辱褌衣	一四
哭寒旅程	二二
二穴蹂躪	二八
破華無慘	四〇
生贄母娘	五五
恥辱宴席	六〇
公辱答刑	七三
地獄入山	八七
補遺	九三
後書	九五

此の物語は虚構です。登場する人物、組織、地名、事件、年齢は架空の物であり、実在する如何なる事象とも関係はありません。

緒言

この物語は、ロバート・ケネス・ウィルソンの手法により中国で発見された写本を土台に、嗜虐妄想を通奏低音として筆者が再構築した虚構小説である。歴史的地理的位置付けは考慮していない。写本には後宮入りとか政略結婚への言及があることから、主人公は成人年齢に達しているものと推察される。

本書中に出てくる諸単位を説明しておく。

・時刻

一日は不定時法により十二刻に分ける。

子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥

細分するときは、上刻・中刻・下刻に分ける（寅正刻、寅上刻など）。

・度量衡

尺斤法を用いる（これが日本に輸入されて尺貫法となった）。

ただし、一里は約四軒でなく五百六十米である。

・貨幣

銅銭を基本として、基本的に金貨銀貨は使われない。

二十四銖を一両とし、十六両で一斤とする（衡の単位に同じ）。

馬一頭の値段が凡そ二千両であり、玄米十石に相当する。

概数として、一両は現代の千円程度と考えられたい。

表記に関する註記

漢字の読みは時代と地域によって異なるので難読文字にもルビは振らない。
読者各位において読み下していただきたい。

原文を尊重して、擬音・疑問符・感嘆符の使用は極力排除する。

悲鳴に漢字を充てたのは、筆者の銜学趣味です。

縁座無慘

中原の西端に位置する揚国の王都知出。其の中央部、高位高官の群れ住む中に、鵠家の屋敷もあつた。

曇天の一面に青白い閃光が奔ると、一呼吸を措いて雷鳴が轟いた。

内庭で遊んでいた子供達は、てんでに悲鳴を上げて、其の場に蹲った。然し、窓際に座つて子供達を眺めていた波葉は驚いた風も無く、腹にそつと手を当てた。

其れを見て、娘の陽華は和やかな想いに浸る。

母が父と寝所を共にした夜も、晩秋には珍しく雷神が戯れていた。其れから四十余日、母は血穢を見ていない。最近は軽い吐き気や喉の渇き等、悪阻の兆しも現われてきた。

故事に曰く。雷神祝すは男児懷妊也と。

波葉は陽華を産んだ後に子を宿したものの早くに流れてしまい、以後は兆しも無かつた。其れが、十五年ぶりの椿事である。瑞兆も外れる事はあるが、此れだけは何としても真であつて欲しい。

既に男児は弾斬が居るものの、彼は妾腹。父も、出自卑しからぬ正妻の子を嗣子に据えたいであろう。そして、母の地位も安泰になる。其の一方で、弾斬の母親は——嫉妬の念を抱くかも知れない。そう云う次第であるから、今の処知っているのは、陽華と父のみ。

不意に表の方から怒声が聞こえてきた。

「開門、開門。之は禁軍であるぞ」

何やら争う物音が聞こえて——何事と、女子供が怯える裡に、五六人の兵士が奥へ乱入して来た。

「鵜阿久の妻、波葉は居るか。其の娘、陽華は何処」

「わらわが波葉です。如何に王家の兵と謂えど、無礼でありましょう」

波葉が立ち上がり、隊長と思しき兵に向かつて声を励ました。

隊長が波葉に向かつて竹簡を広げた。女に文字が読めるものか。然し定められた手続きであるからには仕方ないといった表情で。

「鵜阿久、賄賂を食み王家の財を掠す故を以て捕縛せり。其の妻子も縁座に問う」

四人の兵士が母娘を制圧し、直ちに縛した。後手に拘束して腰にも縄を打つと云う厳しさだった。

「咦咄啊。何故、わたくしが縛られなければならないのですか」

「狼狽えては為りません」

波葉が娘を叱った。然し、声は震えている。

「あなたの耳には届かぬ様にしていましたが、我が君には善からぬ所業もあるとの噂も聞いています。そう云う夫を持った妻、父を持った娘として、縁座断罪されても致し方の無い事です。其れでも尚、鵜家の者として毅然と振る舞いなさい」

波葉には、此の日ある事を覚悟していたかも知れないが、先年に笄礼を済ませたばかりの、未だ少女の殻を引きずっている小娘に、取り乱すなど云うのは、余りに酷ではあった。

兵は容赦なく母娘を引っ立てる。

其の一方、内庭では——二人の女兒と一人の男児が、此れは捕らえられたと云うよりは拐かされていた。其れを止めようとした妾婢も下婢も、容赦なく引つ立てられる。

目立たない様にと裏門から引き出されて。部屋着の儘牢獄迄連行された。両側に兵士が付いて壁になったので、寒風も人目も幾らかは遮って呉れたけれど。

二人が放り込まれた牢には、四人の先客が居た。陽華と同一年位と、少し年上。母の波葉と同年輩位が二人。皆、夫れ成りに冬向けの衣服を着込んでいる。

「あんたら、鶴阿久の妻子だそうだね」

兵士が牢番に引き継ぐ時の遣り取りを聞いていたのだろう。

「わらわに尋ねる前に、まず名乗りなさい」

牢獄にあつても礼儀を正し、彼我の身分（此方は大臣の妻、相手は身形からしても商人の妻妾と市井の小娘）を弁える波葉だったが。

「大罪人の妻に威張られたくはないね。あたしやあ、おまえの夫に身代を潰された商人の正夫人さ。仁愁様と呼んでもらおうかね」

「……………」

敵意丸出しに罵られて、波葉は言葉を失った。

陽華は、此の夫人の言っている意味が理解出来なかった。此の夫人が投獄された事に父が絡んでいるらしいとは見当が付く。けれど、父の所業に縁座して母とわたくしが投獄された。父が悪いのか、此の夫人の夫が悪いのか——頭の中で收拾の着かない大渦が荒れ狂っている想いがした。

「まあ、おれっちは、おまえさん達に恨みはねえけどな」

盜賊の親分の情婦だったんだから、流刑で済んでありがたい。陽華と同年位の娘が言い放った。

「与苑てんだ。宜しくな」

盜賊と聞いただけで、宜しくしたくない。其れに、女だと言うから同年に見えるのだけれど。男の服を着て陽華より年少だと言われれば、信じてしまいそうだった。

「あたいは、大有りだよ。娼女からは未婚娘の三倍の頭賦を取るってんだからな」

若い——といっても、真つ当な女なら子供の二人位は産んでいそうな女が、盜賊の情婦に負けない位運つ葉な口調。

私娼として客を引いている処を捕まって、当然に三倍の人頭税は納めていなかったのので、其の罪も併せて流刑に処された。

「頭賦の割増は、おめえの父親が王様に内緒で勝手に命じたらしいって噂だ。そりやあ、一族郎党誅せられたって、おかしくねえやな」

「やめなさいよ」

牢屋の隅で毛布にくるまっていた最年長の女が、疲れた口調で他を窘めた。

「弱い者が弱い者をいびって、どうするのですか」

三人が、遡とした。

「吃喰喚。一番の悪人に説教されちゃ、面目が無さ過ぎらあ」

盜賊の情婦が、気の弱そうな年長者を——馬鹿にした訳でもなさそうだった。

「姑師を蹴り倒して怪我をさせたってんだからな。古来からの律じゃあ、斬首は免れねえ

や。でも、郎君が助命嘆願して錢も使つて、流刑で済んだって訳よ」

親を殴れば、それを被害者が訴え出れば、死罪は免れ得ない。嫁が義父母に暴力を振るえば、更に罪は重い。然し夫が庇つたと云うのだから——目に余る程の嫁いびりが透けて見える。のは、世故に通じた者だけであつて。仮令動転していなくても、街の風にも当てぬ様に育てられてきた陽華には察せられなかつただろう。

然し、此の四十女に厭悪は感じなかつた。感じてはいけなないと、己を戒めた。陽華自身、同じ牢獄に入れられているのだから。

狭い牢獄の中。石造りの床には坐毯もなく、四人とも直に座っている。母娘は四人から離れた一隅に身を寄せ合つて座つた。暖等取れず、四人は一塊になつて、殆ど抱き合つている。母と娘も、其れを真似て寒さを凌いだ。母に抱かれる等、十何年ぶりではあつた。やがて、困つた事態が切迫してくる。冷えれば尿意が近くなる。然し、其れらしい小間は見当たらない。

波葉が立つて四人に近付き、向かい合つて正座して尋ねる。

「手を洗いたいのですが、どうすれば良いでしょう。牢番を呼ばわるのですか」

二人の蓮つ葉女は怪訝な顔に成り、婦人の二人は冷笑を浮かべた。

「撒尿かい。其処の隅に甕と踏台があるだろ」

波葉は困惑を浮かべたが……意を決して、甕を跨いだ。控えめに裳裾を捲る。内褲は股の部分が重なり合っているだけなので、脚を開けば自然に割れる。

優に百を数えられる程の間も波葉は羞恥心と闘つていた様だが、やがて小さな水音が牢内の静寂を破つた。

踏台の端に置かれた小箱には枯葉や竹篋が入れてあるが、波葉は思案の末に使わなかった。却って肌を傷付けると判断したのだろう。

「陽華も、無用な恥を捨てなさい」

其の言葉に——陽華は、殆ど小走りに甕を跨いだ。

切羽詰まっていたのは娘の方で、母が敢えて範を示して見せた。そう云う事だったのだ。

陽華も堰を切るのには悪戦苦闘していたが、兎も角も無事に用は足せた。股間が汚れた儘床に座るのは、気持ちの良い物ではなかったけれど。

沈黙の裡に時がのろのろと過ぎてゆく。

陽華は、母に尋ねたい事が幾らでもあった。家族が縁座させられる様な大罪を父が犯していたとは、信じられない。投獄されて、此れから自分達はどのようなのだろう。弟妹は何処へ連れて行かれたのか。妾婢や使用人も捕らえられていたが、矢張投獄されているのだろうか。

けれど。他の四人の耳が気になって、声を出せない。自分達は、悪く思われている。大声では難癖を付けられるだろうし、小声では何か良からぬ事を企んでいると受け取られかねない。陽華は世間知らずではあるとしても、人情の機微に迄疎くはなかった。

何らかの沙汰がある迄、おとなしく待っているしかない。

やがて、銅鑼が一つ打ち鳴らされて。数箇所から物音と声が聞こえてくる。其々の牢へ、食餌が配られているらしい。

此の牢にも——牢番が木格子の前に立って、形式的に点呼を取った。

「京叙、仁愁、与苑、瑠田、波葉、陽華」

名前を呼ばれた者は「はい」「居ります」等と返事をする。母娘も先輩に倣ったのだが。「声が小さい。陽華は居る哉」

叱り付けられて、陽華は動揺し乍ら声を励ました。

「はい、居ります」

全員揃っている事を確認した牢番が、木格子の下の際間から六つの盆を順繰りに押し込む。与苑が受け取っては、娼女の京叙が其れを床に並べて。

「たしかに人数分の食餌を受け取りました。ありがとうございます」

四人の中では最年長の仁愁が口上を述べると、全員が「ありがとうございます」と唱和する。

牢番が立ち去ってから、最年少の与苑が盆を年長者から順に配る。但し、新入りの破葉と陽華は一纏めに、最後にされた。

「おまえ、歳は幾つだい」

与苑は陽華の年令を尋ねて、自分より一つ下と知ると、明日からの雑用はおまえが務めるんだよと命じた。最年少で而も新参なら其れも当然の事と、陽華も神妙に承った。同じ囚人の身で、元の身分は意味を持たないだろうから、長幼の序は絶対だった。

其の様な事よりも。陽華は、食餌の粗末さに嫌気が差した。米でも麦でもなく、黍と粟を混ぜて葉菜と云うよりも雑草を煮込んだ様な雑炊。

元より。いきなり捕縛され投獄され、明日の運命も分からない。胸塞がるばかりで、食欲等あろう筈もない。

「おい、早いとこ食べちまいな。直ぐに牢番が片付けに来るんだ。きちんと纏めとかない

と、おれっちが叱られるんだい」

仕様事無く、陽華は匙を口へ運んだ。塩味は薄つすらと利いていて、其れでなんとか食べる事は出来ただけだ。こんな量では、母様のお腹の中に居る赤ちゃんにまでは滋養が足りない。わたくしの分もあげようか。いや、こんな残飯以下の餌を母様に押し付けるのは、却って親不孝者のする事だ。其の様な風に悩み乍ら、結局は碗を空にしたのだった。食器の片付けが終わると通路の高価な蠟燭も消されて、牢内は暗闇に包まれる。二つ三つ離れた牢からは、直ぐさまに男の軀が聞こえてきた。女囚達も、矢張身を寄せ合つて、冷えた床に身を横たえる。

陽華も亦、母に抱かれ母を抱き乍ら、眠れぬ迄も目を閉じた。闇の中に渦巻く想念は余りにも激しく、其の一つひとつを追えない程だった。

眠れぬ一夜を明かして。

陽華はさつそくに、与苑に教わり乍ら雑用係として朝餌の配膳と片付けをさせられた。おかげで、食餌の不味さに辟易する暇もなかったのだが。

陽が高くなつてから、母娘は牢から引き出された。大きな首枷を嵌められ、其の枷に両手も前で拘束された。腰縄を打たれて兵士に連行された先は、王宮の前庭だった。

其処には、同じ様に枷を嵌められた父と弟も居た。

「啊……」

声を漏らしただけで、「叱ッ」と制された。

父の後ろに波葉、弟の後ろに陽華が正座させられて。

銅鑼が打ち鳴らされ、廷使と二人の役人が王宮から出て来た。其の後に正面の窓が開け放たれて、其処に国王の姿が見えた。全員が一斉に叩頭する。

廷使が竹簡を広げて、即座に判決を読み上げる。

「前の財度使、鵠阿久。賄賂を恣にし王宮財産を掠した故を以て斬。其の財産一切は王に帰す物とする。嫡子、驍嶺は縁座にて同断を以て斬。阿久が妻、波葉。縁座にて同断。但し、絞に代えて流刑二千里に処す。阿久が娘、陽華。縁座にて同断。但し、母の波葉と同じく流刑二千里。仍て件の如し」

昨日の一日で、或は阿久に対して審問が行なわれたのかも知れないが——陽華にとっては青天の霹靂だった。

其れにしても……流刑。昨日に投獄されたとき、同房者が皆流刑に定まっていた事で、或はと云う予感も無くは無かったのだが。

流刑と云うのは、只遠隔の地へ棄てられるだけではない。其の地で徒刑に処せられる。一定期間、二千里の流刑なら二年間を牢獄に繋がるのだ。尤も、此の国では其処に銅山があつて、徒刑に代えて労働を強制される——と、下男下女が風言しているのを耳にした微かな記憶が頭を掠めた。

然し、我が身の行く末を案じている処ではなくなつた。

国王の窓が閉じるなり、父と弟の処刑が直ちに執行されたのだ。

二人は着衣を褌がされ下帯一つの姿にされた。死刑囚に恥辱を与え、庶民に罪の大きさを知らしめる為だった。更に、細長い木の板に罪刑を記した罪状牌が、背中に括り付けられた。

其の姿で前庭から外へ引き出される。父は既に観念したか、俯いて無言。弟は事を弁えぬ迄も、父を見習つて矢張神妙。

二人の後を、母娘も追わされた。

五万の人頭を数える王都の正巳刻。事前の布令が無くても、大門前広場への道すがら、群衆は数百から千を超える迄に膨れ上がった。

既に調えられている截頭壇。

まず、阿久が登らされる。首枷を外され、大きな切株を使った截頭座に頭を載せられる――其の直前。截頭壇を取り巻く群衆の最前列で、兵士に肩を押さえ付けられて膝立している妻子を、初めて正面から凝視める阿久。

「済まない。我の不徳故の末期……」

一瞬言葉に詰まつて。悲痛な声で叫んだ。

「波葉よ、祖霊の祭祀を頼むぞ」

はっと表情を引き締めたのは……波葉ではなく陽華だった。

下人は罪人が叫び終えるのを待つてから、彼を押さえ付けた。

刑吏が大斧を振りかぶつて、一息に振り下ろす。重たく鈍い衝撃音と共に、阿久の頭部が籠の中に転げ落ちた。

「嗚呼啊……」

絶え入る様な悲鳴を漏らして、波葉が崩折れる。

然し陽華は、父の首級を入れた籠に目を据えて膝立の身体を微塵も揺らさなかった。父の遺言は盤石の重みを持って、彼女の心に鎮座していた。

僅か五歳の驍嶄が、截頭台に登らされた。父の無残な最期を目の当たりにして、亦己の運命を知り、泣き叫んでいる。

「いやだ、こわいよおお。かあちゃん……おねえちゃん……」

下人は容赦なく、幼な子を截頭座に押さえ付け、刑吏は大斧を振り下ろす。

気絶して傍らに転がる母を顧みる事なく、陽華は異母弟の最期を見届けたのだった。

——そうして母娘は牢獄へ戻されて、流刑に発つ日を待つ事となった。

死罪や流刑は、万物が実る陽の季節は避けて、収穫後から次の種撒き迄の間に執行される。とはいえ、酷寒の中を流刑地迄歩かせるのは避けて、冬の直前か終わる頃に出立させるのが通例となっている。

そうであつてみれば、母娘と四人の女囚は、少なくとも年が明ける迄は牢獄に繋がれている筈であつたのだが。

恥辱褌衣

然し、翌日。母娘を含む六人に、流刑地への出立が言い渡された。異例の処置だった。

「どう云う事だよ。真冬に荒野へおっぱり出そうつてのかい」

与苑の抗議は、頬桁への拳骨で報われただけだった。

六人は牢から引き出され、後手に厳しく緊縛された。手首を縛るのではなく、腕を水平に重ねられた。更に、胸の上下にも二の腕もろとも縄を掛けて引き絞られた。

乳房を縊り出される異様な感触に、陽華はうろたえる。

此れでも、囚人の扱いとしては略式である。正式に拘束する時は、昨日の母娘の様に首と手が一体の木枷が用いられる。流石に其れでは長旅が困難なので、律の細則を定めた式を枉げての温情だった。

長旅——建前としては二千里、実際の道程でも千五百里に達する。女の足であつてみれば、一日に五十里が精々。一箇月は掛かる。冬の寒さを考えれば、四十日でも足りるか怪しい。

然し長旅の割には、女囚に与えられる荷物は少ない。精々五日分の食料と水。其れに、吹雪等に備えた最低限未滿の防寒具だけだった。其れらは背包に纏められて、背中に縛り付けられた。其の小さな荷物よりは、荷物と背中の隙間に差し込まれた木の板——罪状牌の方が、余程に目立った。

其の支度が進められている処へ。

「讓開、讓開……」

先触れの声が聞こえてきて、八人に担がれた輿が監獄の庭へ入つて来た。輿には豪華な絹衣を纏った男が座している。

役人一同が、慌てて跪拝した。

「敬意を表してお尋ねします。斯の様な穢苦しい場所に、太官が何の御用でしよう哉」

太官とは、きわめて身分は高いのだが役職官位が判然としない相手に非礼を避けて使う言葉である。然し此の場合は、別の配慮もあった。大の男が騎馬ではなく乗輿であるのは——股間の古傷が痛むからに他ならない。どれだけ高位高官にあらうと、宦官は内心で軽

蔑される存在ではあった。尤も、宦官で表向きに名を知られていない太官となれば、後宮の実務を取り仕切る大監か其の直属であろうとは知れるのであるが。

太官は問いに直接には応えず、波葉と陽華を輿の上から指差した。

「何故、此の者達は衣服を身に纏うておる哉」

「これから流刑行に出立させる支度でございます」

「ならば、衣服を褫げ」

役人達が困惑の態で太官を見上げる。

「此の女囚どもの罪状牌が読めぬ哉」

波葉の背負わされた罪状牌には、左の様に記されている。

大逆人鍋阿久之妻 波葉

縁座流放二千里代替死刑

陽華の罪状牌も名前が違っただけで、同様の文言。

尚も役人が首を傾げていると、太官が厳しく叱り付けた。

「死刑に代えて流刑に処すとある。減刑ではなく代替だ。ならば、流刑行は処刑場迄の道程ではないか。褫衣が当然であろう」

無茶苦茶な論法ではあるが。例えば同じ縁座でも、仁愁の罪状牌は母娘とは違っている。

脱獄三千斤商人之妻 仁愁

縁座死刑減免並流放二千里

死刑を減免すると明記されていた。

因みに、商人の名前が書かれていないのは、其の一族の面目に配慮しての事である。商

人は斬に処されているのだから、仁愁が誰の妻であるかは明白。まったくの形式ではあったが。鵜阿久には、其の必要も無いと云う事なのだった。

役人の命令で、下人が二人ずつ母娘に取り付いて縄を解こうとした。

「構わぬ。衣服は切り裂いてしまえ。我は時が勿体無い」

太官が、もどかしそうに声を発した。

「我は、此の秋を二十年も待ちわびたのだぞ」

其の言葉を聞いて、波葉が打たれた様に太官の顔を見上げた。

「まさか、あなたは……截玉竿なのですか」

太官が翳笑を浮かべた。

「漸くに思い出したか。まさしく我は、阿久の陰謀で腐刑に処されて、お前迄奪われた玉竿だ」

「あなたの私慕邪恋ではないですか」

「刑吏ども、何をしておる。此の母娘を全裸に褌がさぬ哉」

下人が腰の小刀を抜いて、衣服を切り裂きに掛かった。

「唳咆啊……焉めて下さい」

陽華は悲鳴を発してもがいたが、屈強な男に肩を掴まれ、更に叫び続けると平手打ちを頬に食らって——魂を飛ばしてしまった。

下人達は襖を切り裂き、縄に圧されて肌が擦れるのも構わず襦袢引き抜いた。更に、残された内褲にも手を掛ける。

「此れだけは許して下さい。褌衣といえど、下帯は残してもらえる筈です」

波葉の嘆願は、截の薄嗤いに撥ね返された。

「男子は陽茎を隠さねばならぬ。然し女子の淫穴は肉嘴で隠されている」
門扉は人目に曝して当然ではないかと迄、截は言い放った。

「あなたは……」

波葉は言葉を失った。

下人の手が、内褲を引き下げにかかった、其の時。

「母は赦して遣つて下さい」

其れ迄呆然としていた陽華が声を振り絞った。

「わたくしは、赤裸にされたつて構いません。もっと酷い事をされたつて文句を言いません。ですから、母だけは……」

余りの悲痛な叫びに、下人の手が止まった。

截はせせら嗤う。

「全裸にされるよりも酷い事とは、例えば、どう云う事かな」

「……………」

陽華が詰まった。此の様に公衆の面前で全裸にされる事は、既に舌を噛み切つて然るべき恥辱だった。此れよりも酷い事等、あろう筈も無かった。

「でも、母の……」

お腹には、赤ちゃんが宿っている——と、言いさして。弟が斬首された意味に思い至った。家系の断絶。同じ死刑でも、縁座で一族の家系を抹殺するのは、本人の死よりも遙かに意味が重い。母が男児を宿していると知られば、腹を割いてでも抹殺されるのではな

いか。口を鎖して、天帝の采配に委ねるしかない。咄嗟に、そう判断した。

勿論。天は自ら扶くる者を扶くと云う戒めは、心に刻んで。

わたくし独りだけでも、母を、母に宿っている弟を護り抜いてみせる。其れが、父の遺言「祖霊の祭祀」を果たす唯一の道なのだから。

陽華は――自らを鷓鴣家の守護者たらんと心に誓った。其れが、想像を絶する恥辱と暴辱へと己を投げ込むとは知らずに。

下人が、更に二人の履物を脱がそうとする。

「其れは掛け。裸足では二千里を歩むに適うまい」

履物とはいえ、室内用の布靴。荒野を行けば、二千里どころか百里で破れるのではなからうか。

漸く準備万端整った処で。其れ迄隅に控えていた三人の胥吏が呼び寄せられた。女囚を流刑地迄護送する（と云うよりは、追い立てる）最下級の役人達だ。六人の女囚が、監獄吏から胥吏に引き渡されて。

愈々出立となつた時。

「あ、いや。暫し待て」

截が、更に時を費やさせる。手招きで胥吏を呼び付けた。

胥吏はおっかなびっくり。潰された蛙のごとくに叩頭して、声が掛かる迄動かない。

截が、殆ど無理強いに胥吏の束役を息の掛かる距離に迄近寄らせて。麗々しく墨書され朱印を捺された木簡を授けた。耳打ちを添える。

「へ、へい……確かに承りましてございますです」

截は頷くや、これは袖から袖へと、小さな袋を与えた。

「無事に送り届けたなら、更に三倍を約す」

胥吏は驚いた顔になって、然し直ぐに狡猾な、いつそ狎れなれしい表情迄浮かべて、恭しく跪拝した。

「時が虚ろう。早々に出立せ呼」

位階の高い人間が気紛れであると、下の者は苦勞する。

然し胥吏はほくほく顔で、刑吏ではなく太官の命に従った。女囚六人の腰鎖を一旦解いて、波葉を先頭に、其の後ろに陽華。後の四人は歳の順に並べ直した。

此れでは、常に母の裸が正面に晒される。陽華は、己を先頭にして欲しいと嘆願しようかと考えて、其れは捨てた。截と云う太官は、二十年に亘る私怨を母に抱いているらしい。何か言えば、更に酷い仕打ちを与えられかねない。

束役が先頭に立ち、他の二人は波葉の横と縦列の後ろに位置を取って。

「歩け」

短い竹笞で、女囚の臀を軽く打った。

「悲唳唳」

殿の与苑は知らず。波葉は少なくとも娘に育ってから此の方、裸の臀を叩かれた事等絶えて無かった。悲鳴を上げて、今度は少しく強く笞打たれて、漸くに歩き始めた。

監獄の門が開かれて——其処には、既に数百を数える圉觀者が蛸集していた。

「啊啊……」

見知らぬ他人の目に裸を曝す等、もしも波葉が独りであつたなら、即座に舌を嚙み切つ

ていたかも知れぬ。然し、愛娘を恥辱の中に置き去りにする等、母として出来る事ではない。波葉は目昏めく想いで歩み続けた。

羞恥は、男を知らぬだけに陽華の方が一段ではあった。然し、母と娘の立場は逆でも、想いは同じだった。否。親には孝を尽くさねばならぬだけ、陽華の想いは強い。其れ以上に……母の胎内に在る弟を護ると云う、強い使命感があった。陽華も、母の後ろに続いて恥辱の道を踏み締めるしかなかった。

大路の左右に垣根となつた群衆は口さがない。

「此れも天罰つてやつよ。鵠のくすねた錢で、さんざん贅沢をしてきたんだろう是」

「死刑に代えて流刑なら、流刑地が処刑台。其処迄の道程は褌衣たあ、なかなか融通の利く御役人様だぜ」

公然たる陰口は、直に品評会めいてくる。

「母親は三十五だっけ。脂の乗り切つた身体つきだぜ」

「でかい乳房、張り切つた臀。あの黒々とした淫叢は、好き物の証拠だぜ」

「いやいや、娘の薄い叢もそるな。裂縫筋が丸見えだぜ」

「けど、母親に比べると細っこいな。乳房なんか、縄で縊り出されてたつて掌に収まりそ
うだ。だいいち、裂縫筋から嘴唇がろくに覗いてない」

「ばあか。処女なら当然だろうがよ。其処がいいんじゃねえか哉」

裂縫筋だの嘴唇だの、聞いた事のない言葉も交ざっていたが、理解できる範囲だけでも、陽華を悶絶寸前迄追い込むに充分な卑猥さだった。全身が羞恥に火照り、寒風を感じさせない程だった。

大路を裏門迄歩かされて、愈々女囚六人は都の外壁の外へ引き出された。無用の者は門の出入を阻止されるから、流石に圀觀者も付いては来ない。

忽ちに、陽華は寒さに震え上がった。壁に圀まれた都とは、吹き付けてくる風の強さが違う。一步ごとに土の冷たさも足裏に伝わってくる。けれど、陽華が心配したのは己の事ではなかった。

こんな寒さでお腹を冷やして、弟は無事で居られるのだろうか。弟の身を案じるのもさる事乍ら、もしも弟が流れてしまえば、鵠家の血筋は途絶える。祖霊を祀る者が居なくなる。祖霊は、人の記憶の中にのみ生きているのだ。位牌は無く名前も知り様がない御先祖様も、祭祀者が絶えぬ限りは命脈を保ち続ける。其れは、奴婢でさえ知っている常識だった。

哭寒旅程

半刻程も歩いただろうか。街道に人や荷物の往来は絶え間ない。都へ向かう旅人は、遠目にも流刑行と知るのだが、前を歩かされている二人が全裸と気付くと足を速めて近付き、其処で立ち止まって驚嘆の眼差しを注ぐ。そして、罪状牌に鵠の文字を見て取ると、さもありなんと納得する。

其れが見て取れるだけに、陽華の恥辱は膨れ上がる。家族が此れだけの辱めに遭って当然の悪行を、父様は犯していたのかと。

旅人とも商人ともつかぬ五人ばかりが、一頭の馬に轆かせた幌付きの荷車と共に、敢えて近付こうともせずに佇んでいるのが見えてきた。

「なんか、しょぼくないか哉」

「昨日の今日で出立だから、有るだけ尚可だ」

胥吏達には、一行の正体が分かっているらしい。

やがて、一行の前迄近付くと。五人が胥吏を遮る様に街道へ出て来て、一斉に跪拝した。

「御役目、御苦労様に存じます。此の先の旅程に、此の荷馬車をお使い下さいませ」

年長の男が口上を述べると、束役は驚いた風もなく鷹揚に頷く。

「誰の身内かな」

「溜田の夫にございます。もしも荷馬車をお使い下さるなら、出来ますれば妻も乗せて遣つて下さいませ」

詰は、身内の待遇改善を求めての賄賂だった。

「荷馬車には、菓草を漬けた火酒を積んであります。防寒の扶けにして下さい。俺等は、与苑の身内です」

与苑は盜賊の親玉の情婦。親玉が処刑されたと云うのに、而も与苑を物に出来る筈もないのに、義理堅い連中ではあった。

「乾肉もあります。某は、仁愁の縁戚にございます」

「御役人様達の套もあります。其れと、婦人向けも一着ですが。何卒、京叙に着せて遣つて下さいませ」

胥吏の一人が荷馬車を検分して、たしかに口上通りの品が積んであると束役に告げた。

「では、有難く頂いておこう。荷馬車に瑠田、京叙に套。酒と肉は、女囚皆にも分けて遣ろう」

改めて五人が平伏する。

束役が、王都の外壁を望見して。

「うむ、五里は遠去かったな。長旅の形にして遣つても善かろう」

三人で手分けして女囚の縄を解き、背包を開梱して、穀物袋と思しき品を取り出した。二枚組になっている。

「此れが官給の防寒套である。王の御慈悲に感謝せ呼」

広げてみても、穀物袋は穀物袋だった。但し、底と両側に穴が明いているので、貫頭衣として上体は包めた。そして、もう一枚の方は筒状になっている。膝丈の裳裾か。袋の縁に縫い付けられた紐で上下を繋ぎ合わせる様になっていた。

女囚達は、腰に鎖を巻かれた儘で袋套を身に纏った。京叙だけは、其の下に娼女仲間からの差し入れも着込んだ。

改めて背包を背負わされ縄で縛り付けられ、罪状牌を立てられた。

穀物袋の套は粗い生地で肌に絨毛が刺さって、痛くも擦ったくもあるが、夫れ成りに分厚いので風を遮り、暖を内に籠もらせて呉れる。此れなら、お腹を冷やさずに済むと、陽華はまず其れを安堵した。

束役は自らが荷馬車に乗り込み、其れから瑠田を引き入れた。更に仁愁も。

見送りの声も上げられず、只万感の惜別を込めて見送る五人を後に残して、女囚は胥吏に追われて街道を先へと進んだ。縛られてはいないし、夫れ成りに暖かいし。女の足とし

てはまずまずの速さで進めた。

波葉と陽華も、素肌に袋套だけとはいえ、先程迄の哭寒とは大違いだった。只、足が感じかむのだけは致し方なかった。

分厚い雲に隠されて日輪は見えなかったが、束役が大体此れ位と判断して、午刻の休みとなった。

胥吏の手で火が熾され湯が沸かされた。女囚達も、腰鎖で繋がれた儘であつたが、火に寄る事を許され白湯を与えられて、半分位は生き返つた気分になった。

「先は長いが、まあ今度はちつとばかり美味しい目も見られそうだから哪」

束役は意味不明の言葉を独り言ちて、収賄したばかりの乾肉を、女囚に迄分け与えた。

溜田と京叙と与苑には一枚、仁愁には二枚、然し波葉と陽華には与えなかった。

「お前達は、死なない程度に甚振つて遣れと、太官様からのお達しなんで哪」

波葉は溜息を吐き、陽華は内心を滾らす。どうせ食事は朝夕の二回が世の習い。午はお菓子を摘む位なもの——己を其の様な風に慰めてから。菓子なんて贅沢品は此の先ずっと口に出来ないのだと、却つて惨めになった。

其れでも、希望は残している。

流刑は、流刑地に着いて終わるのではない。寧ろ、其れが始まりである。二千里の流刑なら二年間、囚人は其の地で徒刑を受ける。二年間の監禁と苦役が明ければ、囚人は流刑地に留まる限りは自由に振る舞える。といつても、生活の基盤が無いのだから、奴婢にでもなるしかない。其の点、陽華の様な若い女囚は有利だった。其の土地の若者に見初められれば妻に迎えてもらえるかも知れない。悪くても、妾婢として誰かに買ってもらえる。

未だ男知らずであれば、まして名家の出自ならば、そうならない筈が無い。

陽華にとつては、僻地の土豪の妾婢であれ農民の妻であれ、此れ以上は無い零落だった。先年には九嬪の一として後宮入りの話もあった（けれど、父が固辞した）し、最近では右大臣の次男との婚約話も進んでいた——と、本人には知らされなくても、下女の耳と口は塞げない。

陽華が零落を受け容れる気構えを即座に持てたのは——母と弟はわたくしが護ると云う、謂わば鵠一族の命脈を繋ぐのは自身しか居ないと云う覚悟からであつた。

其れは事実ではあつたが、然し世間知らずの御嬢様故の決意でしかなかつた……。

半刻の休止が終わると、寒中徒行の苦役が再開される。

束役は自身は荷馬車に乗らず、部下の一人と京叙と与苑を乗せた。男達にとつても寒風を凌げるのは悪くないが、女囚を労つた方が道を稼げる。そして、規定日数より早く流刑地に着けば、前渡しで受けている諸経費が浮いて、其れは三人の胥吏で山分けとなる。規定日数を超えてしまえば——己の錢袋を開かず、女囚への食餌を減らすなどの工夫で辻褃を合わせる。

然し、束役の目論見は、いささか別の所にあるらしかつた。と云うのも、未中刻になつて小休止を取った後に、荷馬車に乗せた女囚は瑠田と仁愁であつて、波葉と陽華は朝から歩き詰めにさせたのだ。

元々が荒野を歩いた事のない二人である。寒さに震え、布靴で小石を踏み付け——申刻を過ぎる頃には疲労困憊して、立っているのもやつとと云う有様。

束役は腰鎖を繋ぎ直して、京叙と与苑を先に立たせ、波葉と陽華を引っ張らせる形にし

た。其れでも、二里三里と進む裡に、足が縛れて転びそうになる。

「もたもたするな。歩け」

母娘の肩に臀に、答が叩き付けられる。

「咭咭啊……痛い」

悲鳴を上げようものなら、泣いても無駄だとばかりに、更に叩かれる。

疲労困憊している者を答打つても、回復する筈もない。其れでも、殊に東役は容赦が無い——と云うよりも、残虐だった。

袋套の上からでは効き目が薄いと、復しても二人を全裸にして、臀どころか乳房迄も答打った。寒さに凍える肌に、細い竹が赤い筋を刻んでいく。筋が薄いのは、流石に胥吏が手加減をしているからだ。然し、手で庇おうとすれば、空いている部位を怒声と共に強打する。

母娘が答から逃れるには、前へ進むしかなかった。其れでも、歩みは滞るばかり。遂には波葉が、前のめりに倒れ込んで、立ち上がれなくなった。母に引きずられる形で陽華も転び、矢張立ち上がれない。

「吃ッ」

東役は答を小脇にかかえて、腰の双節棍を抜いた。短い鎖で繋がれた寸一尺径一寸ばかりの二本の棍棒。波葉の裸身を仰向けに蹴転がして、双節棍の片先で乳房を抉った。

「吁吁吁……」

苦痛に顔をしかめるが、其れ以上の反応は無かった。

陽華は棍を手で押し返そうとしたが、邪陰に蹴り払われた。

「吃ッ。荷馬車に放り込め」

母娘に袋套を着せてから瑠田と仁愁を下ろし、二人を積み込んだ。倒れる迄歩かせて、後は荷馬車で運ぶ。此れなら、截の内命である「死なない程度に甚振る」と旅程の進捗、双つの目的を同時に果たせる。

二穴蹂躪

日が暮れてから、一行は伊野村に着した。王都から離れる事四十里。一日に七十ないし八十里を歩む旅人（勿論男に決まっている）には半端な距離なので、此処に宿を求める者は少ない。

束役は村長の屋敷から家人を追いついて、其処を一夜の宿とした。一介の胥吏に其様な権限は無いのだが、太官から拝領した免符が、早速に威光を発揮したのだ。

胥吏は村人から召し上げた酒と肉を卓子の上に積み上げさせ、女囚を侍らせて、宴を催した。

娼女あがりの京叙は如才なく酌等して回り、盗賊の若き情婦だった与苑は束役に抱きかかえられ乍ら、知った事か勝手にしろと不貞腐れて、其れでも与えられた食物は遠慮なく平らげる。年増の瑠田と仁愁は土間にうっちゃられて、けれど背包の乾米は齧らずに済んでいる。

女囚六人は、屋外ではないのだからと袋套は脱がされていた。と云う事は、詰、波葉と

陽華の母娘は全裸で座敷の隅に縮こまる仕儀となった。

肉が減り酒が干されるに連れて、胥吏の関心は母娘に向けられていった。衣食足りて猥褻を知る——である。

扱い易さでいえば京叙だろうし、跳ねつ返りの与苑にもある種の男は食指を動かすだろう。然し、此の二人は仁愁や瑠田と仲が良い。四人纏めて反感を買っては、如何に役人とはいえ何かと遣り辛い。

全裸で縮こまっている母娘には、其の遠慮が無用だった。淫らに弄ぶのも、死なない程度に甚振る範疇だろう。

「其の様な処に引つ込んでないで、こっちへ来て俺等の相手をしろ」

束役が声を掛けると、二人の部下が問答無用で波葉を引きずり出した。

相手をしろとは酌の意味ではなく——部下が二人がかりで波葉を押さえ付け、束役が其の肌を手を伸ばす。

「やめなさい。わらわは昨日に夫を亡くしたばかりの身です……啊啊、嘔吐啊」

悲鳴は、然し男どもの劣情を掻き立たせるばかりだった。部下の一人は波葉の腿の上に座り込み、自由になった両手で臀を揉みしだく。もう一人も片手と膝で波葉の腕を封じて、残る片手で乳房を弄びにかかった。残された最重要な股間は、無論に束役の領分。

「やめて下さい唄」

陽華が叫んで母の元へ駆け寄り、太腿に乗っている胥吏を突き飛ばした。

「母の……貞節を穢さないで下さい。相手をしろと仰るなら、わたくしが致します。母は赦して遣って下さい」

貞節は婦女子に必須嚴守の道德ではあるが、此の場合は口実だった。陽華は、母の胎内で育まれている弟を懸念したのだった。男が女を弄ぶ時、結局はどうされるか位、陽華とて知っている。其の様な事になれば、腹の子は流れてしまうのではないか。其れをこそ、恐れたのだった。弟を護る為には、我が身を穢されようと構わない。其れは既に、荒野を踰越めき歩いていた時から、心に決していた事だった。

「邪魔だ」

突き飛ばした相手が起き上がって、陽華の髪を掴んで波葉から引き剥がそうとした。

「お前には別の使い道があるんだ呼」

「まあ待て噯、忍約」

束役が部下を制した。

「こいつには手を出すなって言ったのは、督握の兄哥じゃねえか哉」

忍約が怪訝な顔をした。

「瓜を割るなって言っただけだ。手だろうと茎だろうと汁だろうと、出したい物を出して構わないぜ」

束役の督握は、もう一人の部下に目を向けた。

「匹贇よ、俺の言う意味が分かるか哉」

波葉の乳房を舐めていた男も首を振った。

「其れじゃ、見てろ。母親は放して遣れ」

波葉は身を起こしたものの、娘が目の前で督握と対峙していると云うのに隅へ逃げるもならず、二人の横に座して成り行きを見守るしかなかった。

督握は陽華に向けて、猫撫で声を出した。

「母の貞節を全うさせたいとは、将に孝女の鑑だな。ならば……」

督握は椅子を横に向け、前に十分な広がりを作ってから浅く腰掛け直し、長褲の前を寛げて脚を大きく開いた。其の中心には、でろんと男茎が垂れている。

「此れを口の中に含んで舐めるなら、お前の願いを叶えて遣るぞ哉」

「……………」

成人男性の陽物を間近に見るのは初めてだった。傘を開く前の茸に似ている。其れも毒々しく赤黒い毒茸。其の毒茸が、さあ舐めろとばかりに起き上がって、長く太く変じていく。

「あの……本当に……」

「一言既出也」

ぴしりと鞭打つ様な言葉に、ふらあつと陽華が膝を進めた。両手を床に突いて、顔を男茎へ近付けた。

「やめなさい、陽華」

波葉が叱責した。

「母様……」

陽華が母を振り返った。

「父様の遺言をお忘れですか」

陽華は、母親の下腹部を瞬時凝視めた。口には出さない。懐妊の事実を知られば、太官に通じている胥吏どもに何をされるか分からない。

身を翻して。一思いに男茎を口に挿れた。

「無吁吁……」

獣じみた臭いが鼻を衝く。生温かく硬くて弾力のある——生焼けの骨付肉の様な舌触り。肉と違つて、僅かに塩辛くてえぐい。

「俺は舐めると言つたぞ。口の中に含んだ儘で、根元から先端迄確り舐めろ」

言われた通りに、口と舌を動かした。茸の傘の部分、取り分けて下唇に接する細い筋の様な所へ舌を這わすと、督握の身体がびくりと震えた。

「噢噢噢、其処だ。此の裏筋を丹念に舐めろ。上下にではない、左右に舌を動かせ」

「其処に続く張り出している所を雁首と云う。此処も舐めろ」

「雁首から先を亀頭と云う。此処には唇を這わせて舌で先端の穴をつつけ」

次々と卑猥な所作を教え込む督握。

「呵唉唉。仔牛は虎を恐れないつてやつだね。あたいらだつて、舐茎は本夫にしかないんだぜ」

娼女らしい感想を、京叙が聞こえよがしに言い放つた。然し、吐き気を堪えて男の命令を忠実に実行する陽華の耳には届いていない。

「悪く言うのは焉めて下さい。あの子は……わらわの為に、身を穢してまで尽くして呉れているのです」

波葉の抗議も、鼻先で一蹴される。

「咳卦。どうせ男に開いた股じゃねえか。勿体ぶるんじゃねえよ」

「……………」

波葉も亦、此の場で妊娠の事実を打ち明けるのは危険だと判断しているのだろう。反駁

もならず、悲し気に俯くのみだった。

「もつと上から下迄扱け。唇を窄めて、頭を前後に揺すれ」

陽華は能う限り激しく頭を振り立てたが、未だ督握は満足しない。面倒だとばかりに、両手で陽華の頭を掴んで、上下に揺り動かした。

「吁……喪呼喚……」

頭を激しく揺すぶられて、眩暈がする。喉の奥迄亀頭に突かれて、嘔吐きそうになる。其れでも逃げようとはせずに耐えている裡に。

「出さず。吐き出さずに飲み込むんだ嘖」

督握の切羽詰まった声と共に――喉の奥に衝撃があつた。どろつとした吐射物が口中にあふれて、陽華は噎せた。けれど、命令に忠実に、其れを唾と共に嚥下した。

「嗚喚喚喚喚。督握の旦那もえげつないね。あたいらだって、飲精は真つ平だよ」

京叙が嘲った。其の対象は督握ではなく、陽華かも知れない。

噎せ返り乍ら陽華は――自分は娼女でさえ呆れる程淫らな真似をさせられたらしいと、漸くに気付いた。でも、此れで弟は護れた。

陽華の安堵は、瞬時に覆される。

「へっへ。次は俺等の番だ是」

忍約が卓子の上の皿を片隅へ寄せて、其の上に陽華を腹這いにさせた。

「待つて下さい。さっきので赦して下されたのではなかったのですか」

「督握の兄哥は、な。だけど、俺等は未だ許しちやいねえ是」

「……………」

陽華はきつく唇を嚙んで、然し蹂躪に身を任せるしかなかった。

「兄哥、肛穴は破る門がねえから、構わねえよな哉」

忍役の問いに督握が苦笑する。

「俺には、同性交情の趣味は無え是。好きにしろ哉」

「いやいやいや。婦女の後門は、男とはまるきり違うん啼」

忍約が陽華の後ろへ回ったのだが。陽華は、此れから何をされるか見当も付かず、何れにせよ酷い事をされるのだらうと怯えている。

忍約は右手の指に唾を付けて、陽華の双臀を割った。

「悲……」

肛穴を捏ねくられて、陽華が悲鳴を上げる。恐怖の余り、身体が強張って動かない。

つぶつと指を挿入されて、陽華は一層大きな悲鳴を上げる。中を捏ねくられ、気色の悪さに全身が鳥肌立った。

「吁嗚呼……痛い」

指を二本三本と増やされて、陽華は悲鳴を重ねた。然し、おとなしくされるが儘になっている。此処で逃げれば、是迄の恥辱が無駄になる。わたくしの命に代えても母を——弟を護る。只、其の決意だけが陽華を支えていた。

此れ位ほぐしておけば善かろうと、忍約は指を抜いて。

「大して溜まっていねえな。まあ、牢獄の餌じゃあ、糞の溜まり様もなかるうが哪」

其れじゃ、愈々いくぜ——と、陽華の腰を両手で掴んで、勃起した男茎を肛穴に押し付ける。

「悲嘆嘆……まさか……」

糞を出す穴に男茎を挿入されるとは、其の様な事が可能とは、思ってもいなかった。けれど、此の男は其の積りらしい。

忍約が腰を押し付けてくる。ぐううつと肛穴が押されて、周りの皮膚が引き攣れる。そして……ぐぼっと貫かれる感覚。

「吁啊嗚呼……痛い、熱い……」

陽華は叫んだ。流石に、激痛から逃れようと上体を起こしかけたのだが。

其の頭を、匹贇に押さえ付けられた。と同時に、悲鳴で開いている口に男茎を突き挿れられた。

「牟哺吁……」

前門の男茎、肛門の陽物。進退は、とつくに窮まっていた。

「ひでえなあ。肛交だけでも、女にとつちや恥辱も窮まれりつてえのに、口交まで一緒かよ」

京叙が、本気で呆れた声を上げた。

「こんだけ辱めて、処女は残すつてか。呵唔、旦那の目論見が分かってきたぜ。陽華は可哀想だけど、精々鍛えて遣れよな。あたいなんか足元にも及ばない、立派な娼女になるぜ」

三人の胥吏は苦笑したが——陽華には、何の事か分からなかった。其れは、波葉も同じだろう。分かるとすれば、すれっからしの与苑位か。

「其れじゃ、跳ねっ返り娘の言う通り、ちつとばかり鍛えて遣ろう是」

匹贇と忍約は気を合わせて、抽挿を開始した。同時に突き挿れ、同時に引き抜く。

「喪呼喚……」

大の男二人に前後から揺すぶられて、小柄な裸身は颶風に翻弄される木の葉同然。陽華は肛門の痛みも口中の嘔吐も訴えられず、只颶風が熄むのを待つしかなかった。

流刑行に携わってきた胥吏どもではあるが、役得に与るとしても、たいていはまともな愛交。其れも瑠田の様な年増とか京叙の様な娼女ばかり。漸くに笄年を過ぎたばかりの処女の口と臀を慰む等、盲亀の浮木優曇華の花は言い過ぎとしても、絶えて無かった事だった。京叙なら「早漏」と罵ったであろう瞬速で、狼藉は終わった。

忍役は汚れた男茎を見下ろしていたが、流石に憐憫を思ったか、外へ出て井戸で清めて来た。

陽華是最悪の屈辱だけは免れたと——其れを理解したのは、矢張京叙独りだったろう。宴は（陽華を除いて）無事に終わり、屋敷には充分に部屋があつても女囚六人は厩へ追ひ遣られて、夜が更けてゆく。

矢張四人と二人に分かれて身を寄せ合い、女囚達も眠りへと、過酷な現実からの逃避行を試みる。

然し母娘は、そもいかない。

「あの男達は——娼女も言っていた様に、とても破廉恥で猥らな行為で、あなたを弄びました。でも、女としての貞操だけは、穢さないで済ませて呉れました」

まったく慰藉になっていないと分かつてはいても、波葉は他に言葉を見付けられなかった。

然し陽華は、受けた衝撃が余りに大きかったので、母の言葉に縋り付くより他に、身の

処し方を知らなかった。貞節を守れて、母と弟も護れたのだから——最悪の運命の中での上首尾とは言えるだろう。

我が娘が幾分かは落ち着きを取り戻したと見て取ると。

「何故、母を庇ったのですか」

次は諭しにかかった。

「いえ、あなたの配慮は分かっています。母ではなく弟を庇ったのですね」

母親の胸の中で頷く事で、娘は返事に代えた。

「あなたの心掛けは嬉しく思います。けれど、真冬の荒野の二千里行。お腹の子は、何れ流れてしまうでしょう」

「其の様な事には為りません。わたくしの防寒套を譲ってでも、日々の食事を分けてでも、母様と弟は護ります」

葉波は悲しそうに首を振った。

「流刑地では二年の徒があります。無事に子を育てるのは至難です。其れよりは、徒刑を終えてから、あなたが子を生しなさい」

「麦畑に黍の種を蒔いても麦は生えないと教えて下さったのは、母様です」
思わず声が大きくなっていた。

「うるさいね。とつとと寝ちまいな」

京叙に叱声を浴びせられた。

「祖霊の祭祀は、男子にしか務められません。残された鷗家の男子は……」

逆境の中に希望を託して、陽華は母の腹を撫でた。

陽華を教育したのは母親だった。葉波は言葉を失って、娘を強く抱き締める事しか出来なかった。

暫くの沈黙が続いて。今度は娘の方から口を開いた。耳元に囁く。

「ねえ、母様……あの宦官は、何故に母様に私怨を抱いているのですか」

「……………」

長い沈黙があつた。

「あなたを巻き込んでしまったのです。思い出すのも厭ですが、話さない訳にもいきませんね」

彼を前にして思わず詰った通り、截玉竿の邪恋が発端なのだと、葉波は言葉を紡ぎ始めた。

二人は屋敷が近い幼な馴染だった。玉竿が五つ歳上。然し、波葉が男女席を同じうせぬ歳頃になつても屋敷へ招じ入れたり、彼の父母も其れを窘めない。扮装家酒に付き合つて呉れるのは楽しいけれど、添い寝の真似事迄もして、夫婦は寢所では此の様な事をするのだと——流石に内褲の中に手を差し入れられた時は、泣き乍ら逃げ帰った。

其の様な事が幾度かあつて、波葉は玉竿を嫌う様になつていった。

然し、名家同士ではあるし血筋はまったく繋がっていないしと条件が揃つていて、ほぼ必然的に婚約の話が両家の間で、寧ろ波葉の父親の方が截家よりも熱心だった程だ。

其処へ突如として現われたのが、鵜阿久だった。鵜家も名家ではあつたが、代々の血が薄かったのか、一族の数が少ない——と云うよりも、阿久が最後の一人に成り兼ねない状況だった。もろに政略結婚。其れも妻を出す側に利の薄い縁談であつた。

然し、波葉は阿久を好いてしまった。流石に此の辺りの機微を、母は娘に語らなかったが。

波葉の心が己に向いていないと知って焦ったのか、或は阿久と迄は言わぬが鵜一家の謀略でもあったのか、玉竿は重大な失策を犯して王の逆鱗に触れ、死を賜りかけた。然し、彼の才を惜しむ者があったか、截家には王も氣を遣わなければならなかったのか、玉竿は腐刑に留められた。

彼は一旦は政の表向きからは姿を消したが、後宮の宦官として勢力を伸ばし、遂には王の側近に迄登り詰めた。

其れでなのか——と、父が後宮入りに強く反対した理由を、陽華は悟った。玉竿の手が回って、陽華はいびり殺されていたか、或は父への人質に取られていただろう。

五歳の弟迄が斬に処された理由も、陽華なりに推察できた。

男子の根源を奪うのであるから、ある意味、死刑よりも残酷な刑罰ではある。矜持の問題だけではない。己の血筋を遺せないものであるから、祭祀もされず、詰は己が此の世に存した証しが未来永劫失われてしまう。

復讐の念に燃えた玉竿が、鵜阿久の庶子である幼な子迄斬に処させたのも、宜なるかな——では、あろう。

では、妹達は。二人の妾婢は——と、陽華は其処に思い至った。

「辛い目に遭うでしょうが、罰せられはしません」

大した関心も無さそうに、波葉は答えた。

「兵隊の長が読み上げた令旨を聴いていたでしょう。鵜家の財産一切は、王に帰すると」

其の中には、妾婢を筆頭とする奴隸も含まれる。まさか後宮へは迎えられないでしょう。

家臣に下げ渡されるか、売り払われるか。

「運が悪ければ親子が引き離されるかも知れませんが、其れも王都の中での事。母様達よりは、余程恵まれています」

截玉竿との経緯は、納得のいかない処もある。表向きでの動きは、父様から漏れ聞いた事柄だけだろう。

其れよりも。人として処罰されるわたくし達よりも、財産として扱われる者達の方が、余程恵まれていると云う皮肉。陽華は、其処に微かな羨望を抱いた。

其れは――本人は知らず。彼女が、其の様な扱いを受け容れてしまう道程の第一歩を踏み出した事に他ならないのだった。

※続きは製品版でお楽しみください。